

現代日本における社会問題の分析

田中重人 (東北大学文学部准教授)

3年生・大学院生対象：2020年度 1学期 <木2> Google Classroom クラスコード **g42ap45**

1 『講義概要』 記載情報 (一部)

- ◆ 到達目標: 社会問題を分析するための基本的なスキルを習得する。
- ◆ 目的・概要: 家族制度・人口変動・社会政策を中心として、近代以降の日本における社会問題の変遷を学ぶ。受講者各自の関心にしたがって文献調査を行い、途中経過の報告と討論を行いながら日本近代史に関するレポートを作成する。
- ◇ 参考書: 佐藤望ほか (2012) 『アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門』 (第2版) 慶應義塾大学出版会。
- ◇ 成績評価方法: 授業中の課題 (30%)、途中経過等報告と討論での発言 (30%)、期末レポート (40%)

2 この授業の目標

- 知的生産の技術
- 論文に書く内容を決めるまでのプロセス
- 意味のある問いと根拠のある答え
- メディア、他人、自分自身の利用方法
- 批判することの重要性

3 授業予定

- (1) イントロダクション [4/23-30]
- (2) 論文について発表 [5/7-14]
- (3) 第1講 文献検索とデータベース利用 [5/21]
- (4) 第2講 資料の評価と活用 [5/28 - 6/4]
- (5) 第3講 専門用語と理論体系 [6/11-18]
- (6) 第4講 アイディアの創出 [6/25]
- (7) 第5講 議論を組み立てる [7/2]
- (8) 第6講 プロジェクトとしての近代史研究 [7/9]
- (9) 第7講 研究の倫理 [7/16]
- (10) 発表会 [7/30]
- (11) 講評とまとめ [8/6]

※ 受講人数などの都合で授業計画を変更する可能性があります。

4 注意事項

- 授業は Google Classroom で行う予定です (クラスコードは g42ap45 です)。もし使えない場合には、教員まで連絡してください。
- 授業時間外に、個別面談やグループ活動をおこなうことがあります (その場合、受講者の都合にあわせて日時を設定)。

5 受講フォーム記入

- 自分の問題関心
- 日頃使っている学習、研究、資料整理、スケジュール管理の方法

6 レポートのフォーマット

この授業では、長い文章を書くことは要求しない。期末レポートでは、つぎのような形式で、必要な情報を短くまとめること(通常、A4用紙2枚以内)

- 問い
 - その背後にある大きな問い
 - 問いの学問的背景
 - 問いの社会的意義
- 答え
 - 必要な予備知識と前提
 - 答えの根拠
 - ありうる批判とそれをクリアする方法
- 問いを発展させる可能性
- 文献

7 宿題

自分の興味に合った論文を一つ選び、なぜその論文に興味をもったかを簡単に説明

- オンラインで読める論文であれば、そのURL (あるいはDOIなど) を書くだけでよい
- そうでない場合は、論文全体をスキャンしたもの (あるいは写真) も提出

来週(4/30)の授業で2-3人のグループを決め、5月7日以降の授業で論文の内容についての発表をおこなう。

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

発表準備

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 論文についての発表の準備

1 次回発表について

次回と次々回、2-3人のグループを組んで、論文について発表します。

- 各自の選択した論文に基づいてグループを決める
- 各グループで、それぞれの選んできた論文について、空き時間に議論する
- 各自、自分の選択した論文について資料をつくる (当日10時までにアップロードすること)

当日の発表手順は次の通り：

- 説明は、グループ内のほかの人がおこなう (3分)
- そのあと、論文を選択した本人が追加説明 (2分)
- 全体で討論 (10分)

報告すべき内容は次の通り：

- 論文の「問い」はなにか、それにどのような「答え」を出しているか、その根拠は何か
- 疑問や批判など
- 内容を発展させる方向性

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第1講 文献検索とデータベース利用

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 先行研究の探索

1 書誌情報について

文献を特定するのに必要な情報を「書誌情報」(bibliographical information) という：

- 書籍の場合、著者名 / 出版年 / 表題 / 出版社
- 雑誌の場合、著者名 / 出版年 / 論文表題 / 雑誌名 / 巻,号 / 掲載ページ (通常は雑誌名だけで特定できるので出版社は不要であるが、CiNii Books などでたしかめる)

論文でこれをどのように表記するかは、自分の分野の代表的な雑誌等のルールを確認しておくこと。

社会学の場合： 日本社会学会『社会学評論スタイルガイド』(第3版) 第4章 <<https://jss-sociology.org/bulletin/guide/document/>>

2 先行研究を探すということ

2.1 探す対象

- 論文・書籍 (研究成果をまとめた文章)
- 資料・データ (研究の対象となるもの)
- 研究者・研究機関
- 研究プロジェクト (研究資金の流れ)
- 雑誌・データベース

2.2 探しかた

- 人に聞く
- 入門書・概説書・展望論文、一般向け雑誌、ウェブサイトなど
- 芋づる式
- 白書、データブック
- 各種データベース

一度の探索で網羅的に情報が集められるわけではないので、ふだんからアンテナを立てておくことが大切である。

3 論文・書籍のデータベース

研究成果は論文や書籍として発表される。

- 国立国会図書館サーチ <<http://iss.ndl.go.jp>>
- CiNii Article <<http://ci.nii.ac.jp>> → <http://tsigeto.info/2018/readg/r180420.html> など参照
- CiNii Books <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>
- Web of Science <<http://webofknowledge.com/wos>>(GakuNin でログインする) → <http://tsigeto.info/2018/readg/r180427.html> など参照
- Google Scholar <<http://scholar.google.com>>

そのほか、図書館のホームページ <http://www.library.tohoku.ac.jp> から「データベース」タブを開いてみるとよい。

最近各出版社の電子ジャーナル、電子ブックや大学などの「機関リポジトリ」(repository)の整備が急速に進み、全文をオンラインで読んだり検索したりできる文献が増えてきている。その多くは有料であるが、東北大学で購読契約を結んでいるものは、学内のネットワークからのアクセスであれば読むことができる。学外からの利用については <http://www.library.tohoku.ac.jp/search/ejournal/remote.html> 参照

- 「学認」(GakuNin)に対応しているものは東北大IDとパスワードでアクセスできる
- そうでない場合は、大学で提供するVPN経由で読める場合がある(ネットワーク資源が限られているため、必要な時だけ使用)

4 資料・データを探す

研究対象による。自分の研究分野の入門書や、代表的な研究機関のサイトなどを調べるとよい。

5 研究者・研究機関を探す

大学などでは、所属する研究者(教員・研究員・博士課程学生などをふくむ)の研究成果の情報を収集している。これを集積したデータベースが公開されており、そこから各研究者がおこなった調査の情報を得ることができる。

- 科学技術総合リンクセンター J-Global (科学技術振興機構) <<http://jglobal.jst.go.jp>>
- Researchmap (国立情報学研究所) <<http://researchmap.jp>>

また、研究者が個人的にウェブサイトを開設していたり、SNS等で情報発信していることも多い。

論文等について質問したい場合、著者本人に問い合わせてみるとよい。雑誌論文には著者所属やメールアドレスなどが書いてあることが多い。また上記のJ-Globalなどでも連絡先を調べることができる。ただし、問い合わせの前に、公開されている情報をできる限り集めてから。

6 研究プロジェクトを探す

多くの調査研究は科学研究費補助金(文部科学省または日本学術振興会)などの助成を受けておこなわれているので、その研究課題のデータベース中に調査の情報がかなりある。

- 科学研究費補助金データベース(国立情報学研究所) <<http://kaken.nii.ac.jp>>
- 日本の研究.com <<https://research-er.jp>>

7 雑誌・データベースを探す

各研究分野には、通常、その分野の中心となる学術雑誌がある。そうした雑誌については、新刊情報をチェックするとともに、過去にさかのぼって読んでおく。

雑誌がつくられる過程 (特に掲載する論文をどのように決めているか) に注意すること。

また、分野ごとにデータベースが作られていることも多い。

- 国立情報学研究所「学術研究データベース・リポジトリ」 <<http://dbr.nii.ac.jp>>

8 EndNote Web (文献整理ソフト) について

Web of Science 画面上部の「EndNote」から、メールアドレスを登録して使う。

- Web of Science でみつけた情報を保存できる
- CiNii などのデータベースからの情報も import できる
- いちど登録しておけば、学外からも使える

9 次回までの課題

今回は、データと資料をあつかいます。各自の研究で使っている (または使おうとしている) データや資料について、説明できるように準備しておいてください。

- それはどういう性質のものか
- どういう観点から分析できそうか
- 注意しなければならないことはなにか

報告用の資料を用意する場合は、Google Classroom の「ストリーム」にあげておいてください。

現代日本学社会分析研究演習 I / 現代日本学演習 III 「現代日本における社会問題の分析」

第2講 資料の評価と活用

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] データ・資料の収集と評価の方法

1 電子資料情報の識別子について追記

電子化された (インターネットで公開された) 文献の場合、従来の (印刷・製本された) 文献とは若干あつかいが異なる。

- 削除・変更されることが多く、その履歴がわかりにくい → 自分の見たバージョンをダウンロードするか、<http://web.archive.org> などのアーカイブサイトに登録しておくとうい
- 特定するために何の情報が必要かが確定しにくい。著者名や日付が不明であることも多い。

URLなどを示す場合は、つぎのような優先順位で考えるとよい：

- DOI (<http://doi.org/>) や Handle 識別子 (<http://hdl.handle.net/>) があればそれを書く (武田 2012)
- 複数の URL がある場合は、“Permalink” などと指示されているものか、なるべく短いものを選ぶ
- URL に #, ?, & が入っている場合は、そこから先を取り除いてみる

2 1次データ・2次データ

実証研究に用いるデータについては、「1次」「2次」の区別をすることがよくある：

1次データ： 自分自身で新規に (実験・調査・発掘・シミュレーションなどによって) 収集したデータのこと

2次データ： 他人が収集した (公開された) データのこと

1次データの場合にはデータ収集の方法や過程を自分自身が知っていて問題点を認識しやすいが、2次データの場合には必ずしもそうではない。

→ メタデータ、パラデータとその評価 (社会と調査 2017)

→ 研究不正と実験ノート

3 1次資料・2次資料・3次資料

一方で、公刊された資料を利用する場合、その資料を「1次」(primary)、「2次」(secondary)、「3次」(tertiary)等に分類することもある：

Primary sources are original materials that are close to an event, and are often accounts written by people who are directly involved.An account of a traffic incident written by a witness is a primary source of information about the event; similarly, a scientific paper documenting a new experiment conducted by the author is a primary source on the outcome of that experiment. Historical documents such as diaries are primary sources.

A secondary source provides an author's own thinking based on primary sources, generally at least one step removed from an event. It contains an author's analysis, evaluation, interpretation, or synthesis of the facts, evidence, concepts, and ideas taken from primary sources. They rely on primary sources for their material, making analytic or evaluative claims about them. a review article that analyzes research papers in a field is a secondary source for the research. A book by a military historian about the Second World War might be a secondary source about the war, but where it includes details of the author's own war experiences, it would be a primary source about those experiences. A book review too can be an opinion, summary or scholarly review

Tertiary sources are publications such as encyclopedias and other compendia that summarize primary and secondary sources. Many introductory undergraduate-level textbooks are regarded as tertiary sources because they sum up multiple secondary sources

(Wikipedia 2019)

この分類の場合、**公刊された資料の範囲で** 議論の根拠をどこまでさかのぼれるか、が問題である。

4 データ・資料の選択・収集とその評価

各自の研究テーマに応じて考えてみる

文献

社会と調査 (2017)「特集 パラデータの活用に向けて」『社会と調査』18: 4-61.

武田英明 (2012)「DOIって何?」(図書館総合展2012版) <<https://www.slideshare.net/takeda/doi2012>>

Wikipedia (2019) "No original research". *Wikipedia*. <<https://en.wikipedia.org/wiki/WP:NOR>> (15 March 2019, at 23:22).

第3講 専門用語と理論体系

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 用語・概念と理論について

1 概念 (concept)

- 名称 (用語)
- 内包 (intention): どんな性質のものか → 定義
- 外延 (extention): なにが含まれて何が含まれないか
- 分類と境界事例
- アイデア (idea) と理想型 (ideal type)

2 理論 (theory)

統一的説明を与えるための体系的知識。通常、概念間の関連のかたちで表現される。

- 共通性の発見 (帰納: induction) と概念構築 (conceptualization)
- 単純化とモデル (model)
- 公理 (axiom: 検証されない前提) と演繹 (deduction)
- 予測 (prediction) と因果 (causality)

3 仮説 (hypothesis) と実証

世の中が実際にどうなっているかに関して

- 事実、データ、資料
- 直観 (intuition) と仮説構築
- 仮説検証と論理実証主義 (logical positivism)
- 観察と実験 (介入)
- 共同主観 (intersubjectivity) と社会的事実 (social fact)

4 規範 (norm) に関する議論

世の中はどうかあるべきか、私たちは何をすべきか (すべきでないか) に関して

- 価値 (value) をどう扱うか
- 正当性と一貫性

5 具体的な論証 (argument) の形式

Toulmin (1958) のモデル

- Claim (結論)
- Data (論拠): 事実として観察できる事柄
- Warrant (保証): Data から Claim をなぜ導出できるか
- Backing (裏づけ): Warrant の根拠
- Rebuttal (反駁): 例外や誤差の指摘
- Qualifier (限定子): Claim はどの程度確からしいか

氏川 (2007) なども参照。

6 次回までの宿題

次の資料を作り、授業開始時間までに Google Classroom の「ストリーム」に上げておくこと。

- 各自の研究課題について、専門用語を5-10個えらび、その定義と、相互の関係を示す
- 自分の研究に関連したどのような「理論」があるか、ひとつ以上紹介

文献

Toulmin, Stephen Edelston (1958) *The uses of argument*. Cambridge University Press.

氏川 雅典 (2007) 「トウルミンの議論モデルの変容: 批判から寛容へ」『ソシオロゴス』31: 1-19. <<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slogos/archive/31/ujikawa2007.pdf>>

第4講 アイディアの創出

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] アイディアを出してまとめていく方法

1 ボトムアップ法

こまかいところからつくりはじめ、それらをあとからまとめる方法。KJ法 (川喜田 1967, 1970; 大岩 n.d.) など。

- カード (古紙を切ったものなどでよい) を用意する
- 思いついたことをカードに書く
- 全部並べて一覧し、**直感にしたがって**「似ている」カードをまとめる (いわゆる「カルタ取り」)
- 各グループに、その特徴を表す「ラベル」をつける
- 紙の上に図解する、文章を書くなど

2 トップダウン法

- 文章や発表の構成を大きな紙に書く
- アウトラインプロセッサ

3 混合方式

マインドマップ (月刊ビジネスアスキー編集部 2010; マインドマップの学校 n.d.) など

- 大きな紙と色ペンを多数用意する
- 中央にテーマをあらわす絵を描く
- そこから周囲に「ブランチ」(branch: 枝) を伸ばし、それに表題をつける
- ブランチを枝分かれさせながら、思いついたことを書いていく
- ことばで書いてもよいが、図や絵を使い、視覚的・色彩的に描くのがよい

4 宿題

自分がレポートで取り上げる内容に関連することについて、現段階でのアイデアをできるだけたくさん書き出す。方法は何でもよい。

次回授業開始までに Google Classroom のストリームにアップロードしておくこと。

文献

大岩 元 (n.d.) 「カード操作による発想法」． <<https://crew-lab.sfc.keio.ac.jp/kj.html>>

川喜田二郎 (1967) 『発想法: 創造性開発のために』 (中公新書) 中央公論社.

川喜田二郎 (1970) 『続・発想法: KJ法の展開と応用』 (中公新書) 中央公論社.

月刊ビジネスアスキー編集部 (2010) 『本当に頭がよくなるマインドマップ”かき方” 超入門』 アスキー・メディアワークス.
マインドマップの学校 (n.d.) 「マインドマップはなぜ役立つ?」． <<https://www.mindmap-school.jp/mindmap/why/>>

第5講 議論を組み立てる

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 厳密な思考と建設的な批判

1 課題1 意見交換

各自が作ってきた資料を見ながら、グループで意見交換する

- 5分程度で説明、そのあと意見交換
- 思いついたことはとりあえず口に出してみる
- この段階では、最終的なレポートの形や、厳密な理論展開や根拠については保留しておいてよい

2 課題2 問いと答えのリストを作成

現段階でのアイデアに基づいて、問いと答えの候補を、できる限りたくさん書く。

- ありうる質問
- 答えの予測
- 根拠として用意できる (探せばありそうな) 資料等の候補
- 現段階で参照している文献・資料

箇条書きでもいいし、表のかたち (大島ほか, 2005) でもいい。

次回授業開始までに Google Classroom に提出

3 注意すべきポイント

概念と用語

- 定義と意味
- 実際の用法
- 当てはまるものと当てはまらないもの
- 他の概念との関連

論理

- 前提
- 必要条件と十分条件
- 逆や裏を考えてみる

データ

- 対象
- 測定と分析の方法
- 測定の妥当性・信頼性再現性
- 結果をどのように解釈するか
- どのように一般化できるか
- 直観と内省

推論

- 確率と統計的推測
- 場合わけは網羅的か
- 複数の推論の組み合わせ

価値判断

- さまざまな価値基準
- 一貫性

文献

大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2005) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現: プロセス重視のレポート作成』 ひつじ書房.

佐藤望ほか (2012) 『アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門』 (第2版) 慶應義塾大学出版会.

第6講 価値ある研究のために

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[テーマ] 良い研究とは何か / 倫理的注意事項

1 良い研究とは

1.1 研究評価の3要素

- 有用 (relevant) → 問い (と答え)
- 新しい (original) → 答え (と問い)
- 正確 (reliable) → 根拠

1.2 具体例

Matthias ほか (1954) によるニオブ-スズ合金 (Nb_3Sn) の超伝導 (superconductivity) の研究

問い: Nb_3Sn を何度まで冷やすと超伝導状態になるか

答え: -255 度 (= 18 K)

根拠: 実験したらそうなった (図参照)

田中 (1996) によるフルタイム継続率の研究

問い: 戦後日本において、結婚・出産・育児期の女性のフルタイム継続率はどのように変化したか

答え: 20%程度でほぼ一定

根拠: 1985年SSM調査の職業経歴データによる分析の結果

田中 (2018) による「少子化」言説の研究

問い: 日本の公的な言論では、「少子化」ということばはいつどこで出現したか

答え: 1980年国会 (4月8日、参議院文教委員会での文部省委員答弁)

根拠: 国会会議録 (<http://kokkai.ndl.go.jp>) ほかで「少子化」を検索した結果

1.3 注意点

「問い」と「答え」1組だけで1本の論文ができるとは限らない。そうでないことのほうが多いので、いくつもの「問い」と「答え」を組み合わせて論文を書き上げるのがふつう。

研究のプロセスでは、さまざまな問いを立てて並行して答えを探していくことになる。論文を書く際には、実際に答えを出してきた順序とはちがう組み立てかたを考えること。

2 倫理に関する諸問題

- 他人の発案によるアイデアを自分の発案であるかのように書いてしまった
- 出典を明示しないで他人の文章を書き写した
- 他人の文章から無許可で大量に引用した
- インタビューに基づいた論文のなかに、対象者が特定できるような情報があった
- 特定の個人や団体を中傷する文章があった
- 差別表現やステレオタイプを強化する表現の使用

2.1 情報をめぐる利害

文章を書く＝情報の流布 → 他人の利害との衝突

- 学問上の優先権
- 情報からえられる経済的利益 (知的所有権・著作権)
- 個人の秘密・名誉

学問上の優先権

学問の世界では、「誰が最初に考えたか (または発見／発明したか)」ということに非常に高い価値が置かれている。第1考案者 (または発見／発明者) は、そのアイデアや発見について「優先権」(priority) を持つ。

- 他人の発想や発見を自分のものであるかのように詐称 (plagiarize) しない
- 引用または参照によって誰の業績かをはっきりさせること (出版されているものに限らず、たとえば雑談のようなものであっても、アイデアが他人由来である場合はそのことを示すと考えること)

優先権は、著作権とはちがって、時間がたっても消滅せず、譲渡・相続不可能である。また、引用するにあたって当事者への連絡・許可は不要である。

大学のレポートにおける plagiarism は、筆記試験における cunning と同様の不正行為とみなされる。

経済的利益の保護

経済的利益を保護するために、さまざまな「知的所有権」が設定されている：特許権／意匠権／商標権／実用新案権 など。これらはいずれも、**経済的利益** がなければ問題にならない。

著作権

これに対して、著作権 (copyright) の侵害は、経済的利益がなくても問題になりうる。(→「版權」は旧称)
著作権者は著作物について種々の権利を持つ

- 複製／貸与／変形／展示／口述／翻訳／放送 など

著作物とは、「思想または感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術又は音楽の範囲に属するもの」(著作権法2条)をいう。たとえば文章／音楽／舞踊／美術／建築／図面／映画／写真／プログラムなど (著作権法10条) がこれにあたる。アイデアやデータそのものではなく、それらの表現されたかたちが保護の対象になる。

- 作成者が自動的に著作権者になる (登録の必要なし)

- 著作権は譲渡できる
- 作者の死後一定期間 (国によってちがう) で消滅する
- 著作権者の許可なしに複製・販売・上演などをしてはならない。ただし例外として、私的利用のための小規模な複製と**正当な範囲での引用**は許可なしにしてもよい。

著作物からの引用

公表された著作物から通常の記事だけを引用する場合の許容範囲 (木下 (1981, p. 165) に田中加筆)

- 引用は 400 字以内
- 引用に関するルールを守っていること
- 引用文が自分の書くものの 2 割以内
- 著作物の全体を引用してはならない

文章以外の引用の場合は、つぎのようになる

絵画, 図面, 写真, CG など: 著作権者の許可をえる (木下, 1981, p. 166)。

表, 詩歌, キャッチコピーなど: グレーゾーンだが、許可をとるほうがよい。歌詞については日本音楽著作権協会 (JASRAC) が手続きを代行していることが多い。

2.2 秘密を守る権利

名誉毀損罪: 「公然と事実を指摘し、人の名誉を毀損した者は〔……〕に処す」 (刑法 230 条)

プライバシーの権利: 判例「宴のあと」事件 (東京地裁 1964.9.28) 「私生活をみだりに公開されないという法的保障」

名誉やプライバシーの侵害が許容される例外的な条件は、次のふたつ (刑法 230 条の 2 第 1 項ほか)。

- 公益性が高い
- 内容が真実である

ただし、つぎの場合は許容基準があまくなる。

- 死後相当の期間がたっている場合
- 公人／著名人である場合

公表前に十分な準備を

- 真実性の確認
- 当事者への情報開示 (文書の性質、公開の範囲など)
- 当事者に許可をとる
- 文章の当事者チェック

許可のないまま公表せざるを得ないこともあるが、相応の覚悟が必要である。

2.3 差別表現とステレオタイプへの対処

マイノリティに対する蔑視表現、あるいは属性に基づく固定的イメージ (stereotype) を助長する表現に注意すること。

- 身体的特徴・障害・疾患・性向・民族・出身・年齢などに関する表現で、蔑視的な意味合いをふくむもの
- ステレオタイプを助長する表現: 「女性ならだれしも……」「関西人らしいボケツッコミ」
- 言及対象や読者が特定の属性を持っていることを当然の前提とする表現
 - 男性の医師は「医師」、女性の医師は「女医」と表現するような書きかた
 - 「17歳といえば高校生」
 - 「われわれ日本人は……」

こうした表現が問題になるかどうかは文脈による。自分の文章がどのような派生的効果を持つか、読者によってどのように受け取られる可能性があるか、よく考えること。

2.4 研究倫理教育

近年、研究不正を防止するためのガイドラインが整備されてきており、大学や研究機関には、トラブルを防ぐための教育が義務付けられるようになってきている

- 文部科学省による一般的な指針 (http://www.mext.go.jp/a_menu/jinzai/fusei/) のほか、各学会などの倫理規定を確認しておくことよい (たとえば日本社会学会 (2005))
- 東北大学「研究不正の対応に係る体制整備について」 (<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/fuseibousi.htm>)
- オンラインコースの受講 (近々義務化されるはず)
- 人を対象とした調査・実験を計画している場合は、文学研究科の倫理委員会の審査を受けること

文献

木下是雄 (1981) 『理科系の作文技術』中央公論新社。

Matthias, B. T., Geballe, T. H., Geller, S., and Acorenzwit, E. (1954) “Superconductivity of Nb₃Sn”. *Physical review*. 95(6), p. 1435.

文部科学省 (2014) 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」 (平成 26 年 8 月 26 日文部科学大臣決定). <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/1351568.htm>

日本学術振興会 (2015) 「科学の健全な発展のために：誠実な科学者の心得」. <<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>>

日本社会学会 (2005) 「日本社会学会倫理綱領」. <<https://jss-sociology.org/about/ethicalcodes/>>

田中重人 (1996) 「戦後日本における性別分業の動態」『家族社会学研究』8, pp. 151-161.

田中重人 (2018) 「「少子化」論の変遷：日本社会は何から目を背けてきたのか」科学技術社会論学会 第 17 回年次研究大会. <<http://tsigeto.info/18v>>

東北大学研究推進審議会 (2007) 「研究者の作法：研究への愛と誇りをもって」 <<http://www.bureau.tohoku.ac.jp/kenkyo/fb/FFPleaf.pdf>>